

史実と見なされ来つた中国古代の 地震記事に対する批判

——特に国語を中心として——

慶 松 光 雄

序

本稿に述べんとする内容は、今から二〇年前一九四一年、中央气象台から刊行された拙著「支那地震史の研究」^(註)中にその大要を明らかにし、またすでに脱稿しやがて刊行予定の「中国地震資料年表批判」に於ても旧著の意を再補する所があつた。ここに三たび同一問題にふれんとするのは、前二者に於て比較的簡略にすましておいた国語に見える地震記事を中心に、中国古代史に於ける説話としての地震を論ぜんとする意に基くもので、問題の中心と視角を変えてみようというわけである。なお私は本紀要6以来、紀要に載せる拙稿はなるべく平素学校で講ずる所のものを以てこれに当てたいと考えている。学生を相手にほそぼそとやっている内容を天下にさらし、大方の痛烈な批判を受けることによって自らの警めを深めたいと希うともにかかる形で拙い講義の幾分かでもを残しておくことが紀要刊行の意義にもかなうゆえんかと考えるからに外ならぬ。その意味で本稿は、一九五八年度に「中国人の自然観の歴史的考察——特に地震を通して見たる」というふうな題で行つた特殊講義のほんとの一部をなすものであることを断っておきたい。なおまた、同年一月二三日福井大学で行われた第九回北陸三県連合史学会^(この回を以て解消)に於ける私の講演「国語に見える地震記事の批判」の主旨はほぼ本稿にとり尽されていることをあわせ述べておく。

さて、中国の地震史料として信憑すべき最古のものは、春秋経に見える文公九年（前六一八年）、魯国すなわち山東省曲阜県附近の地震を伝えるそれであつて、見かけはこれより古い地震を物語るかに見える諸種の地震史料は、いづれも史実としては信頼できず、説話として見るべきである、というのが、二〇年前の旧著以来変らざる私の持説である。今本竹書紀年に見える地震や星野説または星占いと結びついた地震などは、さすがにこれを事実と信ずる人が少ないであろうが、呂氏春秋・国語・通鑑外紀に見えるそれぞれ、前一二世紀・前八世紀・前五世紀に当てられる地震は、旧著に於ける私の否定にもかかわらず、一九五六年二月公刊された中国地震資料年表に於ては、三つとも信ずべき記事として、何らの疑問を抱かずに載せられている。それに対して私は同書の批判中に再度その信ずべからざるゆえんを明らかにしておいた。所が呂氏春秋と通鑑外紀に対しては、私の旧著を熟読していただくだけでも異論を生ずる余地はほとんどあるまいと考えるものであるが、国語に対しては、大意を略述したのみで未だ十分の理由をあげて説明していない。そののみならず、考証学の發達以来、先秦古典のあらゆるものあらゆる部分に対して疑いがなげかけられているといつてもよいほどであるにもかかわらず、中国に於ける地震としては最も著名であり後世に影響する所の最も大きい国語の記事に対しては古来何人も疑を抱かず、吾国近時の東洋学者として特にこの記事を問題とされた小川琢治・岡崎文夫両先生の如きも、むしろ積極的にこの記事に拠つて立論されている。即ち小川先生は前七八〇年（註2）に当てられるこの地震が、西周の領域に破壊的打撃を与え、その後一〇年にして起つた周の東遷の一原因をなした程の大地震であるとし、国語の記事中に見える伯陽父の予言「周の滅亡」はこの事実をびたり当てたものと認め、岡崎博士は、国語の地震と詩経・小雅節南山・十月之交の詩との符合をいい、両者がともに周の幽王の暴政を刺（そし）る意味あいを持つことを述べておられる。また同博士は私の旧著に対し非常に好意ある評言を寄せられたが、その中に国語の記事に対する私の不信に対してだけは特に賛しがたい旨を断つてこられた。両博士の説が公にされたのは、拙著より古いことであるからやむを得ぬとしても、近刊・中国地震資料年表によつても私の国語・幽王二年地震不信

論は一向かえり見られぬようである。これは私の説がつたないことにもよろうが、この問題を前面におし出し中国古代史専攻者の眼につき易いものに於て論じたことがないことにも起因するのではないかと考える。今回それを詳論することによって多年の持論を幾分でも認めて貰うと希うものである。

問題とすべき国語地震記事

本稿に於て問題の焦点とすべき国語に見える地震記事とは卷一周語(上)に存する次の文である。まず原文全体を掲げた上で、それに対する私の読み方・解釈を明らかにしておく。

幽王二年。西周三川皆震。伯陽父曰。周將亡矣。夫天地之氣不失其序。若過其序。民乱之也。陽伏而不能出。陰迫而不能蒸。於是地有地震。今三川実震。是陽失其所而鎮陰也。陽失而在陰。川源必塞。源塞。国必亡。夫水土演而民用也。水土無所演。民乏財用。不亡何待。昔。伊・洛竭而夏亡。河竭而商亡。今周德若二代之季矣。其川源又塞。塞必竭。夫国必依山川。山崩川竭。亡之徵也。川竭。山必崩。若国亡不過十年。數之紀也。夫天之所棄。不過其紀。是歲也。三川竭。岐山崩。十一年。幽王乃滅。周乃東遷。

国語
本文 幽王の二年、西周の三川皆な震う。

筆者 章昭の注(以下「注」とはすべて章昭の注を指す)に、西周は鎬京をいい、幽王がここに居り、三川とは涇・渭・洛を指し、震とは動のことで、地が動いたので、三川が亦た動き、川が竭きたとある。要するに、幽王のいた西周の都・鎬京(陝西省西安附近)の近くを流れる涇水・渭水・洛水の流域一帯に地震があったという解釈で、古來この解釈が何ら異議なく認められているわけである。但し「注」に涇・渭・洛が岐山に発するといっているのは、明らかに事実と反することで問題にならぬ。念のためつけ加えるなら、涇・渭二川はいずれも源を甘肅省東部に発するもので陝西省中部を東流し、涇水はやがて渭水に合せられている。一方、洛水は陝西省北部から東南流するものである。

が、渭水同様、潼関に於て黄河に流れこんでいる。つまり源を異にするこれら三川は末に於て一つになっているわけであるが、三川の流域が主として陝西省にあることも同じである。三川のうち、洛水については後で出てくる「伊・洛」の洛とは別物であることを注意しておきたい。

国語
本文 伯陽父曰う、周將に亡びんとすと。

筆者 註 「注」に、伯陽父とは周の大夫なり、とある。韋昭が伯陽父を周の大夫と断じたのは、史記卷四周紀・幽王三年

の記事に基くものであろう。即ち史記周紀幽王二年の条に国語とほぼ同文の地震記事が見えるが、それにつづく幽王三年の条には、幽王が褒姒を嬖愛し、正后であつた申侯のむすめ即ち申后とその生む所の太子を廃し、褒姒を正后となし、その腹になる伯服を太子となすと記し、その直後に「周の太史・伯陽、史記を読みて曰う、周亡びんと。云々」といつているのが拠り所であらう。ここで注意しておきたいのは、史記の地震記事中には伯陽父ではなく伯陽甫とあること、史記自体については右の伯陽甫と周太史伯陽とが同一人であることは積極的に証明する所を見いだしがたいうことと、韋昭は伯陽父を周の大夫なりと注しているが、史記には大夫ではなく、太史伯陽といっているに過ぎず、大夫と太史、伯陽父と伯陽とには明らかになちがあるということである。なお、「伯陽」が姓、「父」または「甫」を名であると解しても、伯陽という姓の人間がたくさんいたと考えれば、周太史伯陽すなわち伯陽甫との即断はなりかねるわけである。すでに韋昭と同時代、三国呉の人で国語注を著わしたという唐固は、史記に基く「伯陽父」周太史伯陽」説をとらなかつたものと見え、史記集解に引用されているその説には「伯陽甫は周の柱下史、老子なり」とある。伯陽甫を老子と断じたのは老子の字（あざな）が伯陽である所に基くのであらうと小川先生は推定しておられるが、一向唐固説には賛すべきものを感じ得ない。それにしても唐固説を否定することが、ただちに韋昭説を是とするゆえんともならず、要するに伯陽父を周の大夫であるというのも注釈家の一解釈と受けとるべきものであらう。

国語
本文 夫れ天地の氣は、其の序を失わず。若（そ）れ其の序を過（あや）まつは、民これを乱すなり。

筆者註

天地の運行は一定の秩序に従っており、いやしくもその秩序を失うということはないものである。所がここにその秩序が失われた。(静かで動かないことを本体、すなわち天地運行の秩序にかなう姿であるとする大地が動いて地震が起った。)これは民が天地運行の序を乱したのである、というような意味であろう。「民これを乱すなり」といい、じかに「王」といわざるも暗に王を指すものであるという「注」は従うべき見解であろう。

国語本文

陽伏して出ずる能わず、陰迫りて烝(のぼ)る能わず。ここに於てか地震あり。

筆者註

右は末永く、少くとも清末まで最も有力に中国人を支配した陰陽説に基く地震起因説の源をなすものであらうと考える。しかしながらほんとうはどういう意味なのか、私にははっきり把めないというのが本音である。仮りに現代人にびったりくるような言葉でこれをいい直してみても、それは今の人にはわからせるというだけのことで、古代中国人がかかる文字を連ねて表現せんとした所のものと一致するかどうかは疑わしい。また「陽氣、下にあり。陰氣これに迫り、升る能わざらしむ。陰陽相迫り、氣、下に動く。故に地震うなり。」という韋昭の注を読んでみても一向ぴんとこないのは、かくの如き場合の中国注釈家の説明一般に通ずるものである。私は、原文の意味を「陰・陽二氣の相對する力が均衡を得てこそ天地はその秩序を保ち大地も本来の静なる姿でいるが、陰の力が増大して陽を圧迫し、その自由なる活動をさまたげ、陽氣が鬱積するような事態を生ずると地震が起る」というふうに解釈している。しかしこれも私なりの今流の言葉に置きかえてのことであるから、はたしてどれだけ原文の意味を正確につかみ得ているか、もとより確信があるわけではない。しかしあえていうなら、国語のここの原文に対して我々にはつきりするような二、三の異った解釈を用意し国語の編者にどれが正しいかを質せば、おそらくこれも可、あれもよし、と答えるのではないかと推測されることである。近代科学の理論になれた我々と古代中国知識人との間にあるものの考え方それに伴う表現の仕方の相違というものは容易にうずめがたいことは、かくの如き場合に際して常々痛感する所である。

国語 本文 いま三川、実に震う。是れ陽その所を失いて陰に鎮（しず）めらるるなり。陽、失いて陰に在れば川源必らず塞がる。源（みなもと）塞がれば国必ず亡ぶ。

筆者 註 「いま三川実に震う」とは「いま三川、すなわち涇・渭・洛の流域に実際に地震が起った」ということであらうが、その後にく文については前文について申述べておいた通りの意味合いに於てほんとうのことはわかりかねる。「陽、其の所を失いて陰に鎮めらるるなり」と「陽失いて陰に在り」とは同じようなことを重ねていったので、

前文「陽伏して出ずる能わず、陰迫りて悉る能わず」とも大して違わぬ内容を多少言葉を変えていったに過ぎぬものではないかと思う。私の解する大意はすでに述べたのでここには説明を重ねない。ただ陰陽地震起因説に関する国語の本文と章昭の注を通読して考察するに、陰陽二気の位置的関係について、少くとも国語の編者は、本来は陽が上で陰が下にあるものとし、地震が起る場合には、陽が本来の上位の位置を失って陰の下になり、陰のために鎮圧されると考えた如くである。さて右の如き陰陽の相関関係に於て地震が起るとしても、何ゆえそれが「川源必ず塞がる」という事態を起し、さらにまたそれから「源、塞がれば国必ず亡ぶ」という結果を招来するかという「地震↓川源の閉塞↓国家滅亡」という相互関連必然成起説は一向納得できるようには説明されていない。「地動けば則ち泉源塞がる」とか、「国は山川に依る。いま源、塞がる。故に国將に亡びんとす」というような「注」は要するに注釈家がかかる場合試みる常套手段に過ぎぬものであろう。

国語 本文 夫れ水・土、演（とお）りて民用うるなり。水土演（とお）る所無ければ、民、財用に乏し。亡びざる、何ぞ待たん。

筆者 註 「演」を「とおる」と読んだのは「注」に「水・土の氣、通ずるを演と為す。演は猶お潤うがごとし」とあるのに基くものである。諸橋大漢和辞典には、これに類する演の字の解釈として、続字彙補の「演は通なり」、水涇・濟水注の「川、滯越するなく水土、通演す」を右の国語注とともにあげ、一括「とおる」と訓読している。右を「とお

る」と読まずに「うるおう」と訓読する向きもあるように見受けられるが、それも同じく韋昭の注によるものである。ゆえに「うるおう」でもよいわけであろうが、「うるおう」といつてしまうと「水が働きかけて土をしめらす」というふうにはかりとられ、水土の気が互に通じ合うという意味が徹底しない憾があるように感ぜられる。しかし「注」には先きの「演」に対する解釈の後に「水気、潤わざれば土枯れて養わず。（養わず、とは万物を育成せずの意か）故に財用に乏し」ともいつているので、何のことはない「土には水気がなくかさかさになると物を育成したい」というあたり前のことをいつているに過ぎないようである。それなら「演」は「うるおう」と読んだ方が早やわかりがするともいえよう。

国語
本文 むかし伊・洛、竭（つ）きて夏亡ぶ。河、竭きて商亡ぶ。いま周の徳、二代の季の如し。其の川源また塞が

る。塞がれば必ず竭く。夫れ国は必ず山川に依る。山崩れ河竭くるは亡ぶるの徴なり。川竭きれば山必ず崩る。若（そ）れ国亡ぶること十年に過ぎざらん、数の紀なり。夫れ天の棄つる所、其の紀を過ぎずと。

筆者
註 右で伯陽父の言葉は終っている。伊・洛は伊水・洛水を、河は黄河を意味するものであろう。先きに注意して

おいたことであるが、ここに洛水というのは、涇・渭・洛と並べられるそれではない。前者を涇・渭・洛の洛と呼ぶなら、この方は正に伊・洛の洛とよぶべきものである。洛に対して雒の字を当てることもあるが、中国の古都として有名な洛陽は正にこの川の北に位する所にその名を発している。これは陝西省東部に源を有するが、その流域の大半は河南省に属するものとみてよい。伊水はその流域の全部を河南省におくもので、洛陽附近に於て洛水に合し、黄河に注いでいる。「注」に「伊は熊耳に出で、洛は冢嶺に出で、禹は伊・洛に近き陽城に都した」と見えるが、これは孟子万章に「禹、舜の子を陽城に避く」とあるのに基くものであろう。真偽はもとよりはかりがたいが、中国の歴史地理家によればこの陽城は河南省登封県東南三十五里にあったという。登封県から比較的近い伊水流域の伊川県までも五〇軒ほどある。「注」にはさらに「商人（ひと）は衛に都し、そのそばを河水が流れていた」といつている。衛と

は殷（商）の都あととして有名な殷墟（河南省安陽県）のやや南に比定されている。ここからま南に黄河の流域まで一〇〇軒近くはあろう。右の如く章昭の注を信ずるとしても伊・洛の夏の都に対する、河の殷の都に於ける、ともに決して至近距離ではなかったことを注意すべきである。章昭はさらに「二代の季」に対して「夏の桀王、商（殷）の紂王」を当て「数の紀」については「数は一に起り十に終り、十なれば則ち更（あらた）まる。故に紀と曰う」と説いている。紀をアラタマルと訓読する文例として右が引かれるゆえんであろう。

国語 是の歳や、三川竭きて岐山崩る。

本文 国語 十一年、幽王乃ち滅び、周乃ち東遷す。

国語地震記事の信憑性について

私が問題の地震記事を史実として信憑し得るものとせず、説話と見るべきであるという見解を持ち続けてきたことはすでに述べた通りであるが、ここにはその理由をあげて然るべきゆえんを説明しよう。その前に一ついつておきたいのは、この問題は先きに掲げた全文を一体としてその中に於て論ずべきであるということである。というのは、前掲文は大きく二つに分ち得る。すなわち「幽王二年。西周三川皆震。……是歳也。三川竭。岐山崩。十一年。幽王乃滅。周乃東遷。」という事実を記した部分と、右のうちの点線に当る「伯陽父曰。周將亡矣。」に始まる伯陽父の予言と称せられる部分との二つである。この二つの部分に分けることをなぜ最初に問題としておくかというに、それは右の事実を記した部分は史実、伯陽父の口を借りて述べられている部分は説話という見解もあり得るかと思ふからにはかならぬ。これに対して私は、全文一体としてこそ始めて歴史的事実の叙述という形式による説話が成り立っているという見方をなすものである。また従来、この地震を取扱われた小川、岡崎両博士の説の如きも、全文を一体とする立場に於て出されているもので、両先生の説を批判せんとするに於ても、この共通の立場に立つことを要

請されるものである。

さて次に問題の地震を史実とは信じがたいと見る理由を簡条書にして説明しよう。

(1)「西周三川皆震」という文を以て、三川の流域に於ける地震を現わすという章昭の注に基く通説が何ら疑問を持たれずに行われているが、信すべき古来幾万の中国の地震史料の中にも「……川震」と書してその川の流域の地震を現わすというものは一つもない。破壊的地震が起り土砂崩れなどによって河水が塞がれるという現象も、往々起り得ないではないが、その場合も震域の地名の下に必ず「地震」又は「地動」の二字を記し、然る後、河水壅塞のことを記すのが常である。地震を現わすには必ず上に「地」の一字を記し下に「震」又は「動」の字をつけるのが千古不變の鉄則である。地震と地動では前者が圧倒的に多く用いられているが、それでも地震の地の字を省いて震の一字ですませることは信憑すべき文献に於ては絶対にないといつてもよいのである。なお「震」が一字で使われる場合、普通には雷震のことで地震を意味するものではない。所がここでもおもしろいことに、その信憑性に疑いを持たれる地震史料には、往々国語同様「震」の一字を以て地震を表現せんとするものが存在するのである。たとえば、今本竹書紀年、帝癸一名后敏或曰發恵に「七年。陟。泰山震」とあり、通鑑外紀十卷周紀八に「貞定王三年。晋空桐震七日。台舍皆壞。人多死。」とある如きその例であろう。もっとも同じ場所に連続して地震が起った場合、一番初めにだけ「地震」と記しその後は地を略して「震」と記すことがあるが、これは右とは自ら別問題で、改めて説くまでもないことであろう。なお、

国語について問題の文の前後を通読して感ずることであるが、文体は決して特異なものではなく、戦国頃に通行の普通の文体である。もし實際周に地震が起ったという事実があり、それを記すのであれば、他に全く類例を見ない「川震」というような表現を用いることはあるまいと思われる。「幽王二年。地震。」これが当然考えられる文体である。なぜなら、この文章は周語に載せられるものであり、幽王二年と断り書がしてあることでもあり、西周領域内の地震は右の文で十分現わせ、またそれが後世多くの文例に共通の表現法でもあるからである。これに加えて破壊的大

地震であることを現わさんとするなら、家屋が倒壊したとか、多数の圧死者を出したとか、山崩れがあったとか、かの如き場合普通に用いられる表現が見られるはずと考えるものである。

(2) 幽王二年のこの地震は、周の滅亡という大事件と関連して述べられているが、それはまた夏の滅亡・商の滅亡という歴史的事件との一環に於ても説かれているのである。而して幽王二年の場合に於ても地震に伴う現象としての「川竭」が特に重んぜられている。このことは極めて注意すべきである。夏および商の場合には、地震は全く顔を出さずこの「川竭」だけが独りおし出されているのである。以上によつて気付かれるのは、夏・商・周という相連続した王朝、いわゆる三代の滅亡という同一の歴史的大事件が、夏に伊・洛、商に河、周に涇・渭・洛というふうになぞられて、国都に比較的近い国内の代表的河川の涸水という同一の自然現象に結びつけて説かれているという事実である。それはこの話が明らかに夏・殷（商）・周を相連続した一環と考える三代思想の発生後、即ち西周が滅亡したのち東周（春秋戦国）に入ってから成立したことを示すものである。それと同時に国家滅亡と河川の塞竭とを結びつけて説く思想も成立していたからこそ両者の結びつきが見られるわけであろう。ここに於て、何ゆえ西周国都附近の地震を現わすに最も普通である「幽王二年。地震」という表現が用いられず「幽王二年。西周三川皆震」という文をなしているかが明らかになると思う。この場合地震ではせつかくの「川竭王朝滅亡説」を夏・商・周三代にわたって一貫して適用し得ないではないか。右の私の見解に対して伯陽父の言葉の中には「今周德若二代之季矣」とあり、これから見れば三代説は当然らず而も伯陽父の言は予言として地震の直後、すなわち西周の滅亡に先立つ一〇年も前、幽王二年に出されているので、三代王朝滅亡説話の入りこむ余地はないという反論が出されるかも知れぬ。しかしそれだからこそ最初に私は伯陽父の予言のみを切り離して論ずべからざる旨明言しておいたのである。それをもう少し説明してみよう。国語の成立年代というような問題を大上段にふりかざすわけではないが、今問題にしている一文の終りに「十一年。幽王乃滅。周乃東遷」とあるのを見ても明らかのように、西周が滅亡し周の東遷が行われた後にできがあったことだけは間違いない。

ない。そうしてみると国語の編者には、幽王二年の地震も過去のことなら、幽王が一年に申侯のため攻め滅され翌、平王元年に周の東遷が行われた、西周滅亡・周東遷という事件もこれまた同様に過去のできごとである。さて国語を編纂し幽王時代のこの二つの事件、すなわち地震と西周滅亡を記述せんとするに当って編者はそのどちらに重きを置いたであろう。仮りに地震が史実で、小川・岡崎両先生の見られる如く激震、烈震程度であったとしても、国語という書物の性質から見て西周滅亡という重大事件とは比較にならぬほど軽いものであったに違いない。まさに編者にとって幽王に関して記述すべき第一は周の滅亡という事実であつたろうと推察される。而してこの周の滅亡（いわゆる周の東遷）を記すのに、国語の編者が夏・商・周それぞれに「川竭」という同様の自然現象を国家滅亡の前徴としてふり当て、三代を一環とせる史観のもとに王朝の滅亡という史実を説明せんとしている意図も容易に看取し得る所であろう。王朝滅亡の前徴として「川竭」を重視するのは、いわばこの場合に於ける編者の歴史理論という如きものである。さて右に私は特に前徴といっておいたがこれは予言に通ずるものとして注意すべきである。編者は夏の滅亡の前徴には「伊・洛竭」を、商の滅亡のそれには「河竭」を以てした。周の滅亡の前徴としてとり上げたものは「涇・渭・洛竭」である。しかも今はこれが主題である。主題は潤飾し主題らしくよそおいをこらし人眼につくようにしておし出さねばならぬ。ここに於て自然現象による前徴だけでなく、これについて語る伯陽父なる予言者を借りその口を通じ、編者の歴史理論・史観を以て構成した所のものを語らしめるというまことにたくみな叙述形式が生み出されたのではなからうか。かくの如き布石に於てどこまでも大切なのは伯陽父が予言者であるということである。周の滅亡を三川の変動によつて予知する予言者にしたとすることである。かくの如くに考えれば彼の言中に三代が出てくるわけがない。「二代の季」の言あるゆえなしとせずであるが、それによつてかえつて国語編者の意図をはしくも暴露しているといえるのではなからうか。国語・周語、幽王の条を読むに、最初に「幽王二年、西周三川皆震」という文が大きく眼に入ってくる。而してそこにはこれを三川流域の地震と見る章昭の注がある。これだけで読者はすでにこ

この所の記述が地震を主とするものであるという如き錯覚に陥し入れられる。次で伯陽父の言に入って、第一に「周將亡矣」と最も編者のいいたいことが非常に明白な形で語られているにもかかわらず、天地運行の次序から説き起した陰陽地震起因説などが述べられているのを見るといよいよ幽王二年の三川に関する変事なるものを史実としての大地震なる如くに信じこみ、その上に立って、伯陽父を地震に基く國家滅亡の予言者と認めるようになるのではなからうか。国語編者のたくみな誘導に乗せられたものともいえるが、あるいは編者の思わざる方角に読者の眼と心が向けられたともいい得るかも知れぬ。

(3) 予言に関する不信については今一つ、伯陽父の言葉の中に「若國亡不過十年。數之紀也。夫天之所棄。不過其紀」とありそのあとの本文に「十一年。幽王滅。周乃東遷」と記され、予言の如く正に十年にして周の滅亡という事実が起っているという記述に対する疑を述べておきたいのである。地震が起り伯陽父の予言がなされたという幽王二年は西紀前七八〇年、幽王が攻め滅ぼされた十一年は前七七年、周の滅亡すなわち周の東遷が行われたのはその翌年、平王元年・前七七〇年であるから、ちょうど十年目に当るわけである。予言が当たったといえばそれまでであるが、びたり十年、余りに話がうま過ぎ、私には作爲の跡のみ著しいように感ぜられる。

(4) 夏の滅亡の前徴として伊・洛が竭き、商の滅亡の先きぶれとして河の竭きたことが述べられているが、これらは一向史実として信ぜられぬ。これらの信じ得ぬ事実と結びつけて説かれている同じ趣の周の滅亡の前徴としての涇・渭・洛に関する事實は信じがたいと主張することは誤りであろうか。他に国語の記事に照合さるべきものを求むれば、今本竹書紀年、帝癸^{一名}十年の条に「五星錯行し、夜中星隕つること雨の如し。地震い、伊・洛竭く」とあり、また同書、幽王^名二年の条に「涇・渭・洛竭き、岐山崩る」とあるのが見いだされる。今本竹書紀年の信憑性については改めて論ずるまでもないが、右は両文ともに王国維の古本竹書紀年輯校には見当らぬものであって、むしろ国語に基く後世の偽作との疑が濃いものではないか。所で他書に存在する類似の史料といえは幽王二年の地震に関する限り

史記を第一にあぐべきは論をまたぬ所であろう。漢書五行志にもこれに關して注目すべき記載を見いだし得るが、これはここにいう国語の一文の信憑性云々には一向役立たぬので今は問題外とする。史記には幽王二年の件に關して二ヶ所に記載を見る。そのうち、卷14十二諸侯年表の方は「幽王二年。三川震」という簡単な文である。本稿の冒頭に掲げた国語の全文にはほぼ等しいものは、卷4周紀に載せられている旨前述しておいたが、史記に同文があるからといって、国語の記事を信じ得ることに毛頭ならぬと考えられる。なぜなら史記のこの文は国語に基いて作られたと考えられるからである。たといそうではなく別の資料によって作られたとしても、国語と同文である以上、先きに国語の批判に當てた見解をそのままこれに向ければすむことと考える。

(5) 百歩を譲つて、地震を史実として考え、これに伴う現象として記事内容を考察してみよう。なるほど大地震による山崩れなどによつて河川が塞がるという事実は、日本にも中国にもその実例を信すべき史料の中に求められぬことはない。しかしかかる場合は、川の流れが土砂崩れによつてせき止められ急造の堰堤の如きものができあがるのである。であるから、それより上流では水が枯れるどころか次第に溜つて大きなダムができあがり、堰堤から下には水が流れぬという現象が起る。所がかくの如き場合その次に起る今一つの注意すべきことがある。それはやがて堰堤より上に溜つた水の圧力によつて決壊が起り奔流一時に荒れ狂い下流に非常な惨禍をもたらすのがこれである。吾国では長野の善光寺平、富山県常願寺川流域などにその適例が見られる。所が国語の記事中に伺われるのはかようなものとは違ひ「川源が必ず塞がる」というのである。而もそれが、韋昭の注などを参照して考えると、土砂崩れによる右の如き現象を意味するものではなく、地震が起ると川源の水がからからになり従つて川の流れがとまるというにあるらしい。川竭と並んで山崩れのことがいわれているのも地震によつて山崩れが起り、それが流れこんで河流を塞ぐといった意味に於て述べられているのではなく、地震によつて土中の水がなくなることによつて土が乾燥し山自体がぼさばさになつて崩壊して行くということを言わんとするものらしい。一体かようなことがまじめに考えられることである。

うか。もつとも川には水が枯れ、土中の水もなくなり、万物育成の根源が絶たれ、民の財用が欠乏し、そのために国が亡びるという思想がその根底にあるように感ぜられるのはあるいは全文中最も注目すべきものかも知れない。そうなると「川竭」でも「山崩」でも、いわんや「地震」でもない。民の生活資源の欠除が国家の滅亡をもたらすというまことにもつともな主張を見るからである。さて国語の一文を心して熟読すれば、小川・岡崎両先生の考えられたような震度ⅦⅠⅥの地震と推定する資料は何一つないのである。それをあたかも地震に伴う山崩れによる河水の壅塞・洪水というが如くに受取つて非常に大きな破壊的地震を想定するのは、たまたま我々が大地震によるさような現象を知っておりそれが先入主となつて国語の記事を早やがてんするからである。従来問題の国語の一文について云々する人は多いが、いずれも文全体を熟読静思することをせず、各自が自分のとり上げる部分だけについて勝手な先入主を以て解釈している傾があるように感ぜられる。少し心して読めばおかしい所はいくらも眼につくはずであるにもかかわらずさような点は一向誰も問題としない。たとえば「是歳也。三川竭。岐山崩。」とは何を意味するのである。三国呉の人、韋昭ですら涇・渭・洛三川は岐山に発すると考えていた。国語の編者にとつても同様であつたらう。ある王朝の滅亡を説明するにその前徴として「川竭」という現象を持ち出す。それをもっと詳しくいうなら、川源が塞がり川が竭き同時に川源の山の水が枯れ（山がぼろぼろになつて）山崩れが起る、ということであろうが、その場合の山川は当該王朝の領域内にある著名の山川でなければならぬ。ゆえに周に対して涇・渭・洛を持ってきたわけであろうか、この源として三川よりさらに著名な岐山を当てたわけである。所が惜しむべし、ここにはしなくも編者の地理的知識の欠乏による馬脚が現われている。すなわち編者は岐山を以て三川の源と考えたからこそここに山崩れがあつたとしたのである。一体岐山は涇・渭・洛いづれか一つに対してだけでもその源たり得るものであろうか。ここでも重ねて念を推しておくなら、山然りとすれば川また然りである。よく考えて欲しい。実際岐山に山崩れがあつたのではない。但し「川源塞。川竭」に今一つの景物をつけるとすれば「山崩」であり、山崩に当る山としてはこの場合ほかならぬ岐山でな

ければならぬのである。また實際三川の流域に地震があつたかどうか。そんなことはどうでもよいのである。但しこの場合、川としては涇・渭・洛三川以外のものは考慮外である。今はこの三川を「川竭」に結びつけ、周の滅亡を説明するための前徴としておし出すことが必要なのである。周に配する著名の川としては他に考えられない涇・渭・洛の三川、山としては他に匹敵すべきものがない岐山、お膳立ては初めからちやんときまっているのである。なぜなら「川源塞、川竭」を以て国家滅亡の前徴とし、夏に伊・洛を配し、商に河を配するとすれば、周に涇・渭・洛三川、おまけをつけてその川源と考えた岐山、右以外に何があり得ようというわけだからである。

なお国語の記事を離れもつと自由に考えて、大地震のために崩壊した土砂によつて涇・渭・洛三川が同時にふさがれ水流がせきとめられるような事態が起ると考えられるか、といえ、少くとも戦国・秦・漢以後の信すべき地震史料には全く見られないと答えざるを得ない。そのできばえについてはとかくの批判も十分あり得ると考えられるにしろ、中国地震資料年表・陝西省の部には、同省に関する古来の地震資料がよく集められている。ついで右に当る実例をさがされるがよからう。なお小川博士は、嘉靖三十四年の陝西・山西を中心とする大地震、民国九年の甘肅東部を震央とする大地震の例をあげ、陝西・甘肅方面は古来破壊的大地震のしばしば起る地域なるをいい、それがあたかも国語に基き陝西省に幽王二年破壊的大地震を認め得る一証左としておられるように見受けられる。博士の意図がもし右の私の受取り方の如くであれば、それは全くおかしいと申さねばならぬ。嘉靖三十四年の大地震については私も二回の報告を行い、民国九年の地震については河角教授の報告も伺つたことがある。なお山西・陝西・甘肅方面が古来中国に於てしばしば大地震の舞台をなしたことも周知の事実である。私はまたかつて明代の史料に基いて詳細の調査を行い中国に大地震のよく起る所を明らかにしておいたことがあり、同様の趣旨のさらに徹底した業績が近年中国地球物理研究所から出されていることでもある。ある地域に大地震が起つたことに基き、大地震の発生する可能性があるということは、五十年百年に一度、あるいは数百年に一度といった大地震が限定されたある時・ある場所に発生したと

いうことの証明には一向役立たぬはずである。そんなことをいえば、河北・山東・山西・陝西・甘肅一帯どこにも大地震発生の可能性をはらんでいるといえるのである。

(6) 国語の地震記事批判についてぜひとも参考すべきものの一つに、岡崎博士のいわれる詩経・十月之交の詩との関係がある。博士の言葉をそのままに引けば〔詩経の小雅十月篇に次のような意味が読み込まれている。「月が食することはまだよいとして、日が食するに至っては、もうお仕舞だ。電火はひかる。百川が湧く。山は崩れる。岸は谷となり、谷は陵となる。今の位にある人は、この天変に対して自ら戒しめないのか」と。これは言う迄もなく日食と地震の現象に対し、当時の人が恐れをのきつつ、政治の衝にあたるものの失徳を怨んだ辞である。此地震に関する記事は国語幽王二年の条に詳しく述べられて居る。云々〕右で明らかなように、岡崎博士は十月之交の詩という地震と国語幽王二年の条にいうそれとを同一地震とみなされたものであろう。

さて、詩経・十月之交の詩は古来非常に有名なものである。それはこの詩の冒頭に「十月之交。朔月辛卯。日有食之」の句があり、ある年の十月辛卯朔の日に日食があったと記されており、歴史的な日食は天文学的計算により逆算してこれを何年何月何日とはじき出すことができるからである。それがこの場合いかなる意味を持つかといえ、いうまでもなくこの詩の成立年代推定の確実な根拠となし得るという所に重大な意義がひそんでいるのである。詩三百といわれるが、その性質からいって、いずれも容易に確実な成立年代への手がかりをつかみたい。所がここにただ一つ日食を記したものがあり、而も月以外に日の干支まで明記されているのであるから、この詩のみならず詩経全体の成立年代の推定という点からこれが重視されるのも無理からぬわけである。所で、問題の性質が性質ゆえこれに関する従来の研究の多くは天文学者の手になるもので、私のいま参照する所のものも能田忠亮理博の著・東洋天文学史論叢に収められている「詩経の日蝕」(一九三五年稿)と題するものである。右には、中・日・西、諸学者の説が、古きものよ

り新しきに至るまで手ぎわきくまとめられ正しく紹介されているように感ぜられるので、これを唯一の典拠とする。さて同論考の要旨をまとめて見ると次の如くなる。中国歴朝の学者は、十月之交の日食を、あるいは周圉の事情により、あるいは推算により、幽王六年のものであるとかたく主張し信奉し來った。西洋方面の学者も大体をいえば、最近までは従来の中国学者の主張をさらに精密なる推算によつて証明し來ったものである。なお中国には一部これを厲王(西紀前八七
八一八二八)時代に当てる説も行われたが、これはとるに足らぬものとされている。所で、幽王六年に日食が起つたことは確かであるが、それが周の国都鎬京附近、あるいはその領域内から観測できたかという点には疑念が持たれる。国都、今の陝西省西安附近からは到底見られず、はるかに高緯度の地点からでなくては十分な日食は望み得ない。河北省北京ぐらゐまで北に行けば見られたであろうが、周の領域を考えれば不可能であつたろう。そこで周の国都附近から十分見得る大ききで、十月朔辛卯に當る日に起つた日食としては幽王六年以外に求められなければならぬ。それを計算によつて出し、月食などについても十月之交詩にいう所を満足せしめたのは、一九一四年に出されたわが国、(註)平山清次博士の研究と、偶然これに符合する結果を示した一九三五年に發表されたドイツの (註)Willy Harner 氏の説とである。両者の結論をいえば、前記の条件を満足せしめるものとして考えられる日食は、周・平王三六年十月朔辛卯のそれであつて、ユウリス曆紀元前七三四年一月三〇日がこれに當てられるというのである。所で十月之交詩は、普通には幽王を刺(そし)るものとされているが、能田氏によれば、日食を中心に詩の内容にもかない周領内からの十分なる観測可能ということになれば、平王三六年のそれをおいては他に考えられず、この詩を幽王時代に当てるのは要するに從來漠然と認められ來つた通説であり、絶対に動かしがたいというほどのものでもないから、この方を捨て、結局、平王三六年の日食にちなむ詩と見なすのが妥当であるというのである。

さて右の如く詩経・十月之交詩にいう日食を平王三六年前七
三四のものとするれば、国語・周語にいう幽王二年前七
八〇の地震との間には四六年のひらきがある。岡崎博士が以上のことを承知で詩経と国語の符合をいわれたかどうか、今

に知る由がないが、私には詩経・十月之交の詩によって国語・幽王二年の地震を確証し得ようとは考えられない。

国語以外に見える地震説話について

以上六ヶ条に分け、私が国語・幽王二年の地震を説話と見なす理由を説明し尽した。今度は方面を変え、中国古典には他にも非常に古い時代に仮託した地震説話が存することを注意し、国語の記事もこれら同類の一つに数え得るゆえんを証することによって前記自説を裏打ちせんとするものである。そこでとりあげたいのは呂氏春秋と通鑑外記の二つであるが、序にも記した通り、この二つともに旧著に詳述したことであるから、それを見て貰えばすむことであるが、その後多少の補訂を必要とする所に気付いたこともあり、いま旧稿を書き改めてここに再記する次第である。

(A) 呂氏春秋の地震記事について

呂氏春秋は、いうまでもなく前三世紀、秦の宰相呂不韋のもとで編纂された書である。この書の巻六季夏紀に、周の文王が国を立てて八年目の六月に国都に地震があったことを示す記事がある。周文王八年は西紀前一三五年に当てられるようであるが、ともかく前一二世紀という非常な昔、発震年月・震域・震度を非常に明確にし得るのみならず、この地震をめぐる天子と臣下の問答、その後四十数年にわたるその地の地震の状態まではつきり示してくれる史料が存在することは、もしこれが真に信すべきものであればまさに驚歎すべく、世界地震史上、珍中の珍というべきであろう。近刊、中国地震資料年表はこの点をとり上げたものか、出版当時の広告に「本書は紀元前一二世紀以来の中国地震資料を網羅」というようなことが書かれていた。これを見たとき私はひそかに驚きもし、また「さすが中国科学院の大業績、私個人などが長年かかっても知り得なかった中国最古の新地震史料を提供してくれるか」と、大きな期待を寄せていた。所が、あけてくやしき玉手箱、紀元前一二世紀の地震史料と称するものは、この呂氏春秋のそれであった。それならば何も業々しくいうことはない。小川博士も古く論じておられまた私は二〇年前、これが説話なるべき

旨、旧著に明言しておいた。私の旧著は中国地震資料年表の編者に於ても百も承知のはずであるにもかかわらず、参考引用書目の欄にもあげられていず、また呂氏春秋の地震を説話と見る見解も全く無視されている。一方これを史実（史実）と見る小川博士の説も、その後格別の異説を見ないままにきているようであるから、これらに対して私が重ねて自説を開陳しておくのも無駄ではないと考える次第である。さて、私の主張の根拠とて何も特別のものがあるわけではない。誰しも常識的に気付くことを並べ立てればすむことと考える。

(1) 地震は紀元前一二世紀の事件、呂氏春秋の成立は前三世紀、その間に約一〇〇〇年のひらきがある。呂氏春秋という書物は周文王八年のできごとについてそれほど信頼し得るものではない。(2) 金石文・尚書・史記その他、中国の古典には呂氏春秋の地震記事を傍証するものが何もないといつてよい。ただ一つ、韓氏外伝にほぼ同一文が見られるが、これは後漢時代、呂氏春秋を本として作られたものであろうから問題にならぬ。(3) 呂氏春秋は儒家を主体とし、道家・法家・墨家・陰陽家等、雑多の学説を包含し、中国流の分類法に従えば雑家の部に入れられるものであるといわれるが、大体、戦国末の思想を伺うべき書であつて史実を主とするものではない。問題の全文を熟読すれば、これが地震を記述せんとしているものではなく、文王を大きく浮び上がらせ、その徳を顕彰せんことを主眼としていることは余りにも明瞭である。そのことはとりも直さず、これが後世儒家の手によつて作為されたものであることを自ら物語る有力な証左であらう。(4) 記事そのものについて見るに「地動東西南北。不出国郊」とある。何万という古来の地震資料を些細に点検すると、大体地震に対する記述は幾通りかの型に分類され而も非常に古い形式がいつまでもよく保存されていることを知るが、「地、東西南北に動く」とか「四面に動く」などいう記述にはこれ以外にお目にかかったことがない。それはまあまあとしても、「不出国郊」とはどうであらう。注に「（史記） 外を郊と曰う」とある。私はかつてこれを「国郊を出でず」と読んでおいたが、その後よく考えたと「国郊に出でず」が正しいように思われる。中国の邑、殊に国都では必ず城壁が邑の周囲をとりかこんでいたことはすでに殷代に

確かめられる由であるから、ここに「不出国郊」も国都の城壁を出ないという意味であろう。まさに非常に狭い有感震域であつて、これくらいはつきり震域を明示した資料を前一二世紀に見いだし得ることは真に愉快千万であるが、「地動東西南北、不出国郊」によつてまたこれが特に作爲された文であることを明瞭に感じ得るのはさらに面白いと申すべきであろう。(5) 先きに国語についても申述べておいたことであるが、地震或は地震類似のことが文の初めに書いてあり、或はそれが文の大部を占めているからといって、一文の主旨が地震の事実そのものを記述せんことにありと早合点するのは飛んでもないことである。それより、地震のことを問題にしているからといって、地震地震と、これのみに眼も心も奪われている自分自身をいましめるべきではないか。私こそは多年地震を追つてここまで来た。しかし史学を学ぶものとして、絶えず山を見、谷を案じ、その中に走る鹿を追いたいと念じている。鹿を追う獵師山を見ずではない。彼は山を見ずとも山をそらんじるまでに知つてゐるのである。それゆゑにこそ山を見ずして飛走する鹿をよく射とめることができるのである。

以上で私の理由とする所をほぼ述べ尽した。念のために問題の全文を掲げて置くから読者に於て右の可否を検討されたい。

周の文王、国を立てて八年、歳の六月。文王疾(やまい)に寝て、地、東西南北に動き、国郊に出でず。百吏皆な請(もう)し曰う。臣聞く、地の動くは人主のためなり。いま王、疾に寝ること五日にして地、四面に動き、周郊に出でず。羣臣皆な恐れ曰う。請う、之れを移さんと。文王曰く。いかんして其れ之れを移すやと。對えて曰う。事を興し衆を動かし、以て国城を増さば、それ以て之れを移すべきかと。文王曰う。不可なり。それ天の妖を見(あらわす)や、以て罪有るものを罰せんとするなり。我れ必ず罪有らん。故(ゆゑ)に天、此れを以て我を罰するなり。いま故(ことさら)に事を興し衆を動かし以て国城を増すは是れ我が罪を重からしむるなり。不可なりと。文王曰う。昌(シヨウは文王の名)や請(つげ)ん。行を改め善を重んじ、以てこれに移さん、それ以て免かる可けんやと。ここ

に於て、その礼を謹しみ、皮革を秩し、以て諸侯に交わり、その辞令を飭り、幣帛以て豪士に礼し、その爵列・等級・田疇を頒ち、以て羣臣を賞す。いくばくもなくして疾すなわち止む。文王位に即きて八年にして地動く。已に動きのち四十三年、凡そ文王国を立てて五十一年にして終る。此れ文王殃をとどめ妖を窮りしゆえんなり。

(B) 通鑑外記の地震記事批判

北宋の人、劉恕の通鑑外記卷十周紀八に

貞定王三年、晋の空桐震うこと七日、台舍皆な壊れ、人多く死す。

という文が見いだされる。貞定王は東周の主、その三年は紀元前四六六年に比定される。さて、右が信すべきものなら、前五世紀、山西省内に震度Ⅶ～Ⅵに推定される七日間にわたる地震が確かめられるわけであり、中国の破壊的大地震の史料として極めて貴重なものといわねばならぬ。所で右の批判に入る前にこれに関係ある資料を紹介しておく必要がある。その一つは、同じく劉恕によつて通鑑外紀に添えられている通鑑外紀目録卷五晋之条に載せられている。

出公九年、空桐震うこと七日。

という記事である。出公九年は晋の年代を以てしたもので、周貞定王三年というに等しい。今一つは宋末・元初の人、金履祥の著、通鑑前編卷二十五に見える。

貞定王三年、晋地震。

である。ちよつと断つておくが、通鑑前編は清代、御批資治通鑑綱目前編という合刻本が出されたりしているが、本来は資治通鑑綱目とは無関係の書であり、周の威烈王二三年を以て始められている資治通鑑より以前の時代の歴史を明らかにせんとして作られ、書名もそれにちなむものであるが、これには著者自身の手になる「挙要三卷」が添えられ、随所に彼の拠り所とした出典を示している。これを見ると右の「貞定王三年。晋地震」に当て「外紀を以て修す」と記されている。大体、通鑑前編は通鑑外紀の荒唐無稽なる点多きを正すという意気ごみで始められ、なるべく

外紀を出典とすることを避けているにもかかわらず、この記事については外紀によらざるを得なかったことは、この問題にも関係する意味を持つものである。金履祥は通鑑前編を編纂するに当り、通鑑外紀の問題の一文をいかにすべきや、大いに迷ったのではないかと考えられる。彼の場合も、然るべき先秦の古典或は史記などには一切これに類する記事を発見できなかったであろう。さりとて外紀の一文を一概にも捨てかね「晋地震」という形でわずかに書中にとり入れては見たものの出典としては通鑑外紀をあげざるを得ず、「举要」にはその旨記したのではなからうか。さて、右の事実は、宋末元初の人・金履祥にとつても現代の我々にとつても共通の意義を有するもので、通鑑外紀に対する私の批判もこの点から始めよう。

私がかつて中国地震資料の蒐集に励んでいた頃、文献通考^{卷三}一物異考^{地震}之部、あるいは山西省に属する多くの地方

志に「貞定王三年。晋空桐地震七日。台舍皆壞。人多死」という問題の一文を発見した。所がそれらの書には一向出典を記していないので、国語・左伝・史記等、これと思われる古典についてしきりに心当りをさがした。当初の予想に反し悉ことごとく失敗徒労に帰したが、その結果確かめ得たことは、およそ貞定王三年の記事を裏打ちするに足ると思われる然るべき古典には一切同文を発見し得ず、北宋の人、劉恕の著に忽然現われ、これが文献通考或は山西省地方志などに見える同文の出典となつていたのであるということであつた。もっとも私は今に於ても、これが十一世紀、劉恕によつて通鑑外紀の中にまるまる創作されたとは信ぜられず、何かよるべきものが存在したのではないかとの疑問を抱くものであるが、それを探り得ない以上、あるいは創作かと思わざるを得ないというのが偽らぬ所である。然りとすれば、十一世紀の書に忽然見える記事を以て前五世紀の地震を立証し得ぬことは余りにも明らかであろう。次に国語に関する前説中に述べておいたと同じ理由に基き「空桐地震七日」ではなく「地」の一字を欠く「空桐震七日」という記述がしてあることによつて全体への疑を深くするものである。さらに空桐という地名を探ねると、晋国の領内に空桐なる都邑

(かなりの人が住んでいる所)の存在を立証するに足る資料が全然ないばかりか、空桐はむしろ黄帝(主11)にかけられる山名であり、或はわ

ずかに左伝に現われる空桐も河南省虞城県内に比定され、晋、すなわち山西省内にあったものではなく而も都邑とはいいがたいというようなことが判明する。これらはまさしく同記事を否定すべき決定的な材料であると思われる。

.....

以上で呂氏春秋及び通鑑外記に見える地震は、いずれも史実とは認められず、説話または作為の文と見なすべきを明らかにし得たと考える。このことは国語幽王二年の地震記事を説話であると見る私の説に対する幾分かのささえとなし得るものであらう。

国語・呂氏春秋・通鑑外記の地震記事に対する

中国地震資料年表の引用及び註について

中国地震資料年表には、問題の国語及び呂氏春秋の記事を陝西省の冒頭に、通鑑外記のそれは山西省の初めに引いている。所がその引用あるいは注にはなんとも納得の行きかねるものを存している。而してそれをそのままに放置しておくことは、これまで述べてきた私の所説に反するものを認めることになるので、勢いこれに対する批判を述べざるを得ない次第である。なお右は、上下二冊、一六五三頁に及ぶ巨冊を以て構成される同書全体からいえば、ごくわずかの部分に過ぎぬものであるが、以て同書に対する評価の一端を決し得るほどのものはあるうかと思われるので、その意味に於ても私の見る所を明らかにしておきたいのである。

さて同書三五七頁、陝西省の部の最初を見ると、呂氏春秋は「周文王立国八年。歳六月。文王寢疾五日。而地動東西南北。不出国郊」だけで打切られ、国語には「周幽王二年。西周三川皆震。是歳也。三川竭。岐山崩」という中抜きで前後を合せたキセル的引用がしてある。なるほど巻頭・凡例3には、地震状況欄の記載は簡明扼要を旨とすべく、また、地震の実際に関することなきものはつとめて省略する主旨が記されている。しかしそれも場合によりけりで、当

該資料に十分疑を存すべき要素が含まれ、また既にこれに対する疑がはっきりした形で提出されているものにまで、問題となるべき部分を削除し、原文中から史実と見誤りやすい部分だけをとり揃えて読者の前に開陳して見せることは、かくの如き根本史料に基く編纂に於てあるべからざる態度であると思われる。呂氏春秋の一文から地震に関する文王と臣下の問答を削り去り、国語の文中から伯陽父の予言を削除すれば、地震記事そのものの信憑性を判すべき資料はことごとく失われるわけである。なるほど中国地震資料年表記載の文だけを見れば、史実か否かに対する疑問さえ湧いてこないかも知れぬ。編者は、あるいは自然科学的研究に対する地震資料としてはこれで十分であるというつもりかも知れぬが、呂氏春秋や国語は現代地震学者が地震の事実そのものを記録せんとして物したものと全く性質を異にするものである。これらは思想或は歴史記述を主とした先秦の古典であつて、其の中に存在する記述を現代地震学の資料として役立て得るためには、歴史的考証学的批判によつて、史料の信憑性を決定することが第一の学問的段階であり、それに必要な部分はあます所なく読者の前に提供されねばならず、編者の勝手な削除は許さるべくもない。なおここで中国地震資料年表の編者に一つ大切なことを申し上げておきたい。まず申したいのは、呂氏春秋の一文を信憑すべしとするなら、その中には文王八年六月の地震に関するものより一層貴重な地震資料が存在するにもかかわらず、何ゆゑそれまでを捨て去つたかということである。「文王即位八年而地動。已動之後四十三年。凡文王立国五十一年而終。」というこの終りの方にある部分は全く引用されていないが、編者は一体これを見たと見るのである。ここには八年の地震以後、四三年間に地震がなかったとは書いてない。しかし文王八年にかけては「国郊に出ない」有感地震としてはこれ以上に微小なものと考えられないといった程度のもので、でかかど記されているのである。それならば、それ以後に於ても、いやしくも人体に感じ得るほどの地震はことごとく問題とされ記録されたはずである。そのことが一向見受けられないのは、四三年という長い間、少くとも周の都に於ては一回も地震が感ぜられなかったという事実を物語るに等しいものである。ある場所に、いつ地震が感ぜられたか、ということとは然るべ

き資料によって立証することができる。しかし、ある場所にいつからいつまでの間は一回も地震が感ぜられなかったということを経極的に証し得る資料というものは、一九、二〇世紀に至ってさえ容易に見いだしがたい。所が前一二世紀という悠久の昔、紀元前一三五年八月↓前一〇九二年の四三年間には陝西省西安附近に於て一回も地震が感ぜられなかったことを物語る史料をここに見いだし得るわけである。世界地震史料中の珍宝として世に紹介すべきものではないだろうか。

次に通鑑外紀について述べよう。一八一頁、山西省の劈頭に掲げられているのが「周貞定王三年。晋空桐震七日。台舍皆壞。人多死」という問題の一文である。文全体がそもそも短いものである上、全文が間違ひなく引かれているのであるからその点には問題がない。ここでは「注」及び「出典欄」の記載に問題がある。まず注には「此の時、晋は絳に都した。即ち今の山西省曲沃県である。空桐は地名たるに似ている。上に晋の字が冠されているので、まさに晋の地たるべきである。」と見える。「注」は注釈家自身の学識を現わして遺憾なきものとすれば、この注などはこれまた貴重品中の尤たるものであらう。「空桐は都邑名たるに似たり」ならまだ話がわかる。「地名たるに似たり」、真にごもつともごもつとも、高見拜承である。改めていうまでもないことであるが、かかる場合、通鑑外紀の作られた北宋・一一世紀というような後代の文献ではなく、この地震の起つたという周・貞定王三年、すなわち前五世紀の史実を証し得ると認められている中国の然るべき古典中に「空桐」という地名がいかに使われているか、ことにその中に山西省内の都邑として使われている実例があるかどうか、かような点を探索して以て同史料の信憑性を確かめるのが学問の常道として我々に課せられた第一の任務である。次に「上に晋の字が冠してあるからまさに晋の地たるべきである」というに至ってはまさに嘖飯ものであらう。同様の筆法でいけば「晋金沢(かなざわ)」とあれば「上に晋の字を冠してあるから金沢は晋の地、すなわち山西省にあるべきだ」ということになる。到底まともな論議の対象たり得るものとは思われない。而もこれに対する答は既に前言中に尽しておいたことでもあり、一層説明の要なきもの

であらう。

なお出典欄の記載についていうと「通鑑外紀卷一〇引開元占経文」とある。私も開元占経をさがして見たが、通鑑外紀の一文を発見できなかった。あるいは私に見落しがあるのかも知れぬが、もし開元占経に存在するとしても、同書は唐代開元年間に於て中国古来の占文（主として緯書所収）を集めて成った書であり、前五世紀の史実を証するに何ほどの力があるものとも思われない。

結 語

与えられた枚数もはるかに超過したことであり、上述の私見をまとめて結語に代えざるを得ないことになった。呂氏春秋・国語・通鑑外紀に見える中国古代の地震は、従来、諸学者によって史実と信ぜられ、その上に立つてあるいは歴史学的研究の資料として駆使せられ、あるいは現代に於ては地震学的研究の資料として提供されているようである。寡聞のゆえか、これらを史実と見なすことを否定せんとする強い見解をほとんど聞かない。これに対して右は史実としての地震を記述せんとしたものではなく、説話または作為された記事と見るべきであるというゆえんを明らかにせんとしたのが本稿の主旨である。もとより論旨の当否は読者の判断にゆだね、大方の忌憚なき叱正を仰ぎたいと希うものであるが、仮りに私の所説が正しいとしても、かくの如き地震説話の出でくる源をたずね、さらにこれが後世、中国人の地震観にいかなる影響を及ぼし、引いては中国史上いかなる意味を持つに至ったかを明らかにすることが次に課せられた問題である。右についても多少の卑見を有し、すでにこれを明らかにしてきた点もあるが、詳しくは別に稿を改めて世に問う機会を持ちたいと考える。ただ一言附記するなら、国語の地震記事こそは、右についても最も考究すべき多くの問題を蔵する源泉であるということであらう。

註

一 中国地震資料年表は、中国科学院地震工作委員会歴史組の編輯にかかり、一九五六年一月、科学出版社から刊行された。上下二冊、計一六五三頁に及ぶ巨冊である。古来の中国地震資料を広く蒐集、それを省別に年表形式に配列してある。私は一九五七年三月末、東京大学地震研究所月例研究発表会に於て同書に対する批判を行ったが、その後間もなく中国科学院地球物理研究所から寄贈を受け、なるべく早く批判意見を寄せ協力を希う旨の丁寧なる書状にも接した。

二 中国の歴史的地震について、自然科学者としてまた文献学者として、広い視野に立つて非常に早くすぐれた論考を出された小川博士の功績は逸することのできないものと考えられる。それらはことごとく「支那歴史地理研究」に収められているが、特に本稿に関係深いものは、第九章中の「周幽王二年三川地震、伯陽父の予言。周室東遷の原因。周文王立国八年の地震。明嘉靖三十四年大地震」などの諸篇である。

三 岩波東洋思潮所収「支那史学思想の發達」中の「春秋左氏伝と国語国策」篇。

四 一九五〇年五月春季地震学会講演「支那史上最大と思われる地震について」、一九五三年一〇月秋季地震学会講演「明嘉靖三十四年陝西・山西大地震及びその前後の類似地震について」。

五 一九五七年五月春季地震学会講演「最大級の地震について」。

六 「明代地震概況」——「自然と文化・第二号」(一九五一年、京都大学人文科学)。(研究所内、自然史学会刊行)

七 私は中国科学院地球物理研究所員・李善邦氏から寄贈された同氏の著「中国地震区域划分図及其説明」——「地球物理学報第六卷第二期」(一九五七年一月二月)によってその概略を知るに過ぎないが、かくの如き労作の背後には、さらに大きな業績が出されているのではないかと考えられる。

八 平山博士の研究の詳細は左記の論文に見える由であるが、本稿に必要と思われる部分は能田氏の著にもそのまま引かれているようである。

九 “On the Eclipses recorded in the Shu-ching (書經) and Shih Ching (詩經)” Tokyo Sugaku-Buturigakwai Kizi, Ser. 2, Vol. 8, 1914

一〇 “Das Datum der Shih-Ching-Finsternis” T'oung Pao, Vol. xxxi-Livr. 3-5, 1935

前掲書第九章の表題「東西文化民族の地震に関する神話及び伝説」あるいはその中で今の問題に関する「周文王立国八年の地震」という一篇を収めている第四節の表題「支那に於ける地震の迷信と星占」だけを見ると、博士も呂氏春秋所載の地震

を伝説と見ておられるようにも感ぜられようが、二九二頁の本文を見ると決してそうではなく、晏子春秋外篇第七に見える地震を迷信と断じ、これに対する史実としての地震の最も古き例として呂氏春秋・周文王立国八年の地震を引き合いに出しておられることがわかる。

二 康 山西通志 卷三。雍 山西通志 卷一。康 臨汾県志 卷五。熙 汾陽県志 七。等々。

二 莊子在宥篇に「黄帝立ちて天子為ること十九年。令、天下に行わる。広成子、空同の上に在りと聞き、故に往きて之れに見（まみ）えて曰う。云々」とあり、史記^卷一五帝紀にも、黄帝が東西南北を征したることを述べ「西、空同に至り、雞頭に登る」とある。商務印書館発行・^{中国}古今地名大辞典によつて見ると、空桐・峰峒・空同等、種々の文字を当てるようであるが、同名の山が河南・江西・甘肅・四川各省に存在し、甘肅省だけでも三ヶ所にあるのは、前記の莊子や史記に基く伝説的な名称に附会されてきたことを感じさせるものである。

三 左伝哀公二十六年「冬十月。公、空沢に遊び、辛巳、連中に卒す。大尹、空沢の士・千甲を興し、公を奉じ、空桐より入りにて沃宮に行く。」杜預の注によれば、空沢は宋の邑、連中は館名、沃宮は宋の都内の宮名であり、問題の空桐に対しては、梁国虞巢の東南に地、空桐と名ずくあり、といっている。なお司馬彪の統漢書郡国志・梁国虞巢の条に「空桐なる地あり」と記されている。空桐に関してさらに詳しくは、本稿冒頭に記した拙著の註・一八一—一八五頁を見られたい。